

こどもたち

TEKNA

2020年 クリスマス号

クリスマスを祝う心

司祭 ペテロ 吉村 庄司

クリスマスおめでとうございます。クリスマスは一年で一番夜が長い時期に迎えます。クリスマスはイエス・キリストの降誕を祝う日ですが、イエス・キリストがこの日に生まれたかどうかはわかりません。ではなぜ、12月25日がクリスマスに定められているかというと、この時期が一年でもっとも夜が長い季節だったからです。

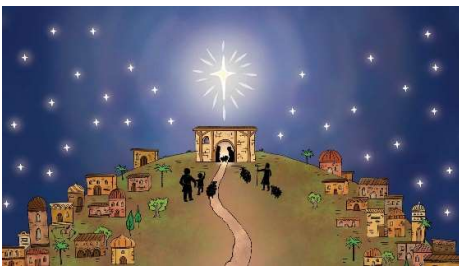
人は誰でも、暗闇の中で何も見えず、行く道を見出すことのできない時を迎えます。暗さの中にいても、かすかな明かりがあれば、その方向へ歩いて行くことができます。イエス・キリストは暗さの中で不安にさいなまれ、道を失っている時の灯火として私たちの間に来てくださいました。

わたしたちは、会話の中で「メリー・クリスマス」と挨拶を交わします。この「メリー」という言葉は古いアングロサクソン語からきたもので、「強力な」とか「勇敢な」という意味をもっていたそうです。「メリー」とは、単に楽しくするというのではなくて、困難な状況にあっても主イエスが共にいてくださるがゆえに、勇気をもって生きていくことができる。希望が見出せないような時にも、主イエスがともにいてくださるがゆえに、一步を踏み出していける。だから、クリスマスは「メリー・クリスマス」なのです。

聖書のクリスマスの物語は、ルカによる福音書2章1～20節によると、天と地をつなぐ物語です。羊の番をしていて野宿をしていた羊飼いたちに、天使が現れて告げました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

このイエスの誕生物語の解説はご承知のことですので省略して、次へ進みたいのです。



ルカ2章22、23節によれば『さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間（33日間）が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。』

生まれたイエスは、けっして親のものではないはずです。子どもの上には、神の望みがあり、期待があり、計画があるものです。神は親に子どもをゆだねたのです。神のみ旨にそって歩めるように、導き、育てる責任が親にあるのです。

神殿にイエスを連れていくということは、子どもは神のものであるという宣言をすることでした。それは、古くから伝わるユダヤ人の習慣でした。「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」のです。この聖句は、京都教区の佐々木二郎主教から、私が「執事按手式」を受けた後の祝会の席で、私の父が、喜びのスピーチで語ったみ言葉です。今もこのみ言葉を鮮明に記憶しています。

さて、神殿で幼いイエスのメシア性を見抜いた老預言者シメオン〔ルカ 2：25－32〕の言葉が、私の心を打ちます。

- 25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。
- 26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。
- 27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定とおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。
- 28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。
- 29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。
- 30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。
- 31 これは万民のために整えてくださった救いで、
- 32 異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉です。」



上記のようにシメオンは^{おきなご}幼子イエスを抱くと、神をほめたたえて神への賛美を歌いました

(29~32)。神の救いがイスラエル人だけでなく、万民の前に備えられたものであることを歌います。このことは、「神の恵みの業によって神と人間とが結ばれた」ということを表します。その絆は、シメオンが腕に抱いたイエスなのです。シメオンは聖霊を通して、神に油注がれた王をみるまでは死なないという約束を与えられていました。幼子イエスのうちにその王を見た彼は、喜びに満たされました。今や彼はこの世を去る用意もできました。

シメオンの得た喜びと平安は、今日にいたるまで、教会のもう一つの貴重な賛歌（祈禱書シメオンの賛歌39、73、418）、ヌンク・ディミティスとなりました。

私たち夫婦も高齢になり、人生の店じまい、老後の生活について考えるようになりました。そのきっかけが、ジョン・J・ロイド司祭が98歳で2018年12月18日に、ニューヨークで逝去されたニュースからです。ロイド司祭が逝去されたことを四日市聖アンデレ教会の信徒であり、ケアハウス白百合の施設長、中島一氏に知らせたところ、“吉村先生、良かったら四日市に戻っておいでよ！”のひと言に、神の啓示とばかり、「即決」しました。小松理事長も“貴方が来てくれると心強いよ”のお言葉は、広い大海を泳いで、ついに懐かしのふるさとの川に還ってくる鮭の心境です。2019年12月8日に国分寺を離れました。神にいつ召されても良いと私は思っています。

ふりかえれば、公費で有名な四日市に、米国聖公会夫人補助会のご寄付により地中海ブルーに塗られた

非常に目立つ青いビルの3階建ての聖アンデレ教会・聖アンデレ・センター（文化施設）が建てられました。四日市唯一の『文化の殿堂』と呼ばれ、多くの人々に利用されました。その牧師であった米国宣教師ロイド司祭に招かれて、四日市に移り、九州教区からの当時聖職候補生だった小松幸男（現在・鈴鹿聖十字会理事長、退職司祭）と私の三人で、新しい教会活動を活発に発展してきたことを、懐かしく思い出しています。

私のクリスチャンネームは、ペテロ「岩」です（マタイ16：18）。大変嬉しいです。使徒ペテロはこう言っています。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花ようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」（Iペテロ1：24、25節）まさにそのとおりです。

私たちはこの世界で、朽ちるもの、枯れて散りゆくもの、変わっていくものに囲まれながら生きています。永遠なるものを探し当てた時、私たちは新たに生まれます。それを見つけるまでは、私たちは充実しているようで、根本的には「むなしい生活」（18節）を営んでいるのではないのでしょうか。

ヨハネ3章16節のみ言葉、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

この個所は、「聖書の中の聖書」と呼ばれます。それは、聖書をコンパクトにしていくと、最後はこの3章16節の御言葉になると言われるからです。「黄金の言葉」と呼ばれたり、「小さな聖書」とも呼ばれます。



私が大切にしているコヘレトの言葉3章1～11節には、「すべてのことに時がある」と語っています。「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。生まれる時、死ぬ時、・・・。」私どもは生まれる時も、死ぬ時も、自分で定めることはできません。ヨブ記が語るように、「主は与え、主は奪う。」すべては神の定められた時があるのです。3章10～11節の言葉は、口語訳ではこう訳されていました。多くの方々の愛唱聖句でした。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見きわめることはできない。」

私たち人間には、様々な「時」が与えられています。時に失敗し、時に自慢し、時に喜び、時に泣き、今という瞬間を生きています。でも、失敗も悲しみも永遠には続きません。別れもあります。また、「出会い」もあるでしょう。「時が過ぎ行く」のは残酷でもあり、同時に、希望です。「今」という瞬間に私たちは揺れ動きますが、時はいつも新たにあなたを迎えます。涙が乾く時があり、涙が溢れる時があります。

人間というものは、小さな存在なのです。でも、人間は美しいのです。時の嵐に翻弄されながらも、怒り、傷つけ合いながらも、人間はなお、生きてゆく。そのはかない生のゆえ大事に、そして支え合い、歩みたいのです。その中で小さな命を顧みてくださる永遠の主を見上げるのです。今日、あなたの心はどのような時でしょう？

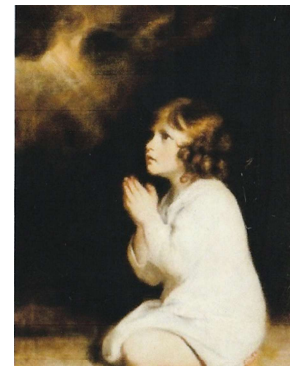
「毎日、今日があなたの最後の日だと思え。毎日、今日があなたの最初の日だと思え。」この言葉は、『タルムード』（ユダヤの聖典）に出てきます。そして、さらにこう教えています。人間は六十年、七十年、八十年、九十年、生きると言います。しかし、百年生きるからといっても、一度に百年生きるわけではないのです。

人間は一日一日を生きるのです。一時間一時間、一分一分を生きているのです。そこで、一日一日が全人生であり、さらには一分、一秒が全人生なのです。最後の日であると思ったら、力満ちて、新鮮な一日を送ろうとするでしょう。あなたが生きているのは、今の一瞬でしかないのです。一瞬一瞬に生きているのです。

今日という日は、自分にとって、絶対に二度と帰ってこない日なのです。だから、大切にしたいのです。いわゆる享楽主義、せつな主義とかいう無責任な生き方をしたくないのです。今日という日は、自分の人生の最後の日であるかのように、真剣に生き、また、大切にする。と同時に、今日が『永遠』につながるかのように、一瞬一瞬をゆるがせにしないで、一生懸命に生きることです。

私たちの一日一日、いや一瞬一瞬は『永遠』につながっていることを自覚して、『永遠の今』を喜び、楽しく生きることです。だから、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の労苦は、その日だけで十分である」（マタイ 6：34）、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日である」（Ⅱコリント 6：2）を心にとめましょう。

心から神の見守りが MJMNY と関係者の上にありますようにお祈りします。



MJM 東京からのお知らせ

12月4日（金）は聖オルバン教会にて植松功さんによるテゼの祈りを zoom と併用で行いました。NY MJM から大勢の方々が参加して下さり、聖オルバン教会、NY、日本の各地からつり、分かち合うことができました。クリスマスの喜びの中、テゼの祈りをお捧げすることができました。当日植松功さんに MJM 東京より「ごはん基金」への献金もお捧げすることができました。

11月14日（土）の zoom 講演会も松永先生のおかげで無事に終えることができ、貴重なお話を伺うことができました。zoom も新たな生活様式の中で便利なツールであると思いますが、一方対面での例会をご希望の方もいらっしゃる、2021年の例会では、上手に併用できればと考えています。予定が決まり次第、メールにてお知らせいたします。MJM 東京のメールアドレスは、

mjmtokyo.tekna@gmail.com です。まだ登録されていない方はメールくださいますか？
みなさま、おからだに気を付けられて、良いクリスマス、良いお年をお迎えください。